

変貌にまつわる喜劇



鷲田清一「モードの迷宮」

■敷地一結節点

敷地は鶯谷駅の南口から北に斜路を行ったところにある、宮間通り沿いの角地に選定した。ここは非常に多くのラブホテル街がある北側の「閉ざし」の景観と上野方面の活気に向かう南側の「開き」の景観の結節点である。また、計画道路によってさまざまな分節された用途地域の結節点にもあたる。私はこのような場所がマクロな視点における開きと閉ざしの間で揺れ動く中間地点であるとし、「閉ざしが逆説的に作る開き」が成立する場であると考えた。



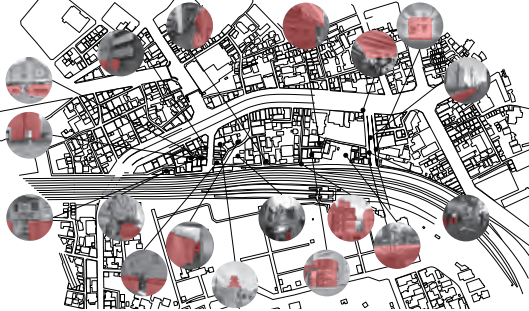
入江 慎
東京理科大学大学院理工学部建築学専攻 安原研究室

変貌

必要以上に隠す。しかしそれとは裏腹に「見える」。例えば、ヴィクトリア朝の女性用コルセット。衣服とはそもそも肉感性を隠伏させるためのものであるはずが、その過剰な操作故、逆に変貌した別の肉感性を顕在化させてしまうようなある種の逆説的な現象性に満ちている。このような現象を建築の「開き / 閉ざし」という作り方の視座にできないだろうか考える。それは単純に開かれた場所でも、ただひたすらに閉じる場所でもないような、いわば或る「閉ざし」を作ることが同時に逆説的な「開き」も作り出す、そんな関係性を孕んだ建築である。

■鶯谷における視覚的ざわめき

鶯谷は周知のとおり、多くのラブホテルが建ち並んでいる街である。ここでは、窓の意味は漂白され、必要以上に外構が建築を取り囲む。私は、必要以上に隠すという操作が逆説的に内側への視覚的ざわめきを強調している景観がこの鶯谷という街に多く存在すると考えた。そのような鶯谷という場所特有に表れている視覚的ざわめきを及ぼすような事象を分析することにした。そしてそれらが鶯谷の空気感を作り出していることを明らかにしたうえで、私は前述のような「閉ざしと開きが逆説的に同居」するような建築が鶯谷にふさわしいのではないかと考え、本設計の敷地に選定する。



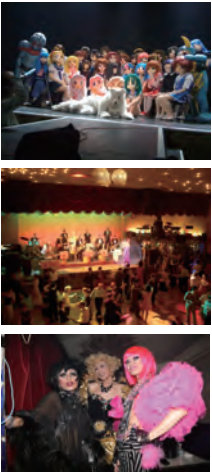
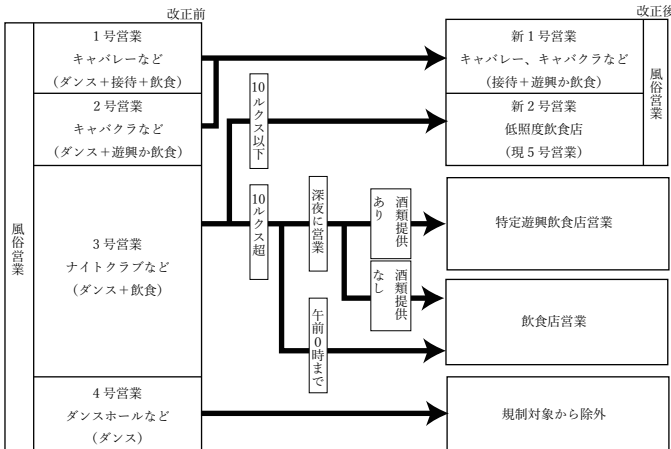
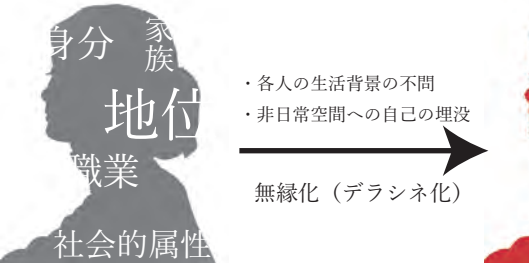
■プログラム—新世紀ビル

鶯谷駅からほど近いところに新世紀ダンスホールと東京キネマ倶楽部という二つのプログラムを擁する新世紀という建物がある。前者は都内に二つしかない社交ダンスのための大型ダンスホールのうちの一つであり、後者はLGBTが集まって行われるイベントやヴィジュアル系バンドのライブなどが頻繁に行われるようなアングラの聖地とされているイベントスペースである。これらはいずれも風営法規制の名残やマジョリティからの固定概念によって社会から取りこぼされた文化のカケラである。そしてこれらのための空間は完全なブラックボックスとして完結したものだ。事実、彼らは普段の社会的属性を取っ払って非日常性の高いブラックボックス化された空間に自己を埋没させる、いわば「無縁の公共性」に身を置くことで独自のコミュニティを築き立ててきた。しかし、私は「彼らには彼らなりの社会への接統の仕方」があり、それがなされることによって彼らの文化が生き続ける場所がゲットではなく、マジョリティ社会との共生ができる居場所となることを目指す。



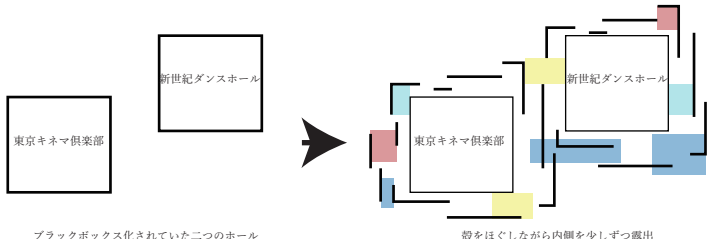
■無縁化（デラシネ化）

ダンスホールやキネマ倶楽部に訪れる人たちは共通して、普段の生活とは全く別の非日常的な状態に身を投じる。本修士設計では、彼らの居場所を都市につくるにあたって、彼らの「変貌」という行為に着目した。ここに訪れる人たちは共通して、普段の日常を脱ぎ捨て、別の非日常の自分に着替える、といった行為を行う。つまり、彼らは、ここで変貌という行為を媒体に個人が持つ性別、家族、地位といった社会的属性を取っ払い、全く別の「或る私」になることが許されるのだ。私は、このような彼らの普段の日常を脱ぎ捨て、別の非日常の自分に着替える、といった行為に対してもっと空間が寄り添ってもいいのではないかと考えた。ここで、このような無縁化（デラシネ化）という状態に焦点を当てて建築を考える。具体的には、現実からいったん彼らを遮断するための閉ざしと、その後変貌した彼らが解放される場所を部分的に外に開くという構成を与えていく。



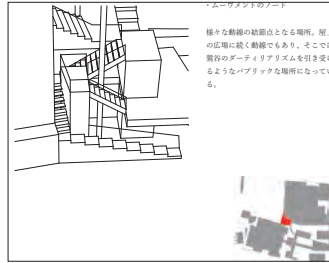
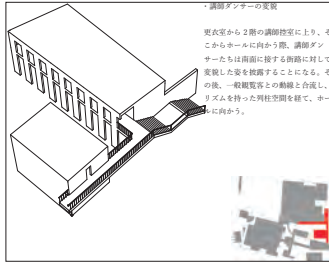
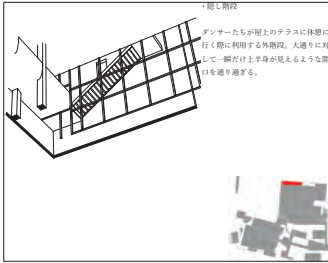
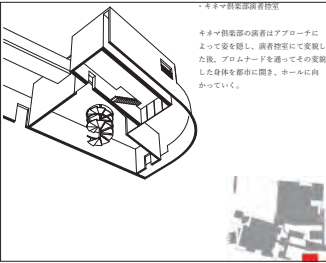
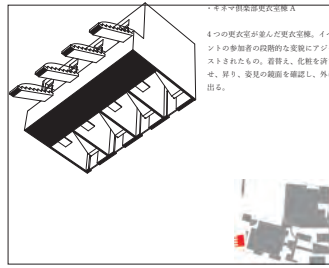
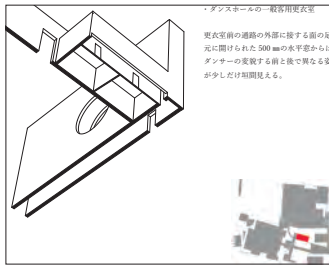
■ダイアグラム

本設計は、単純に開かれるのではなく、異界の住人たちにとって必要な「閉ざし」が第一に作られ、それらが部分的に開きを与えていく構成を必要とする。そこで、従来のブラックボックスの殻をほぐしていく過程で、少しずつずれたところがホールの延長であったり、他の機能が展開されたりすることで鶯谷という街の空気感の中で社交ダンスが少しずつ都市にシーンを与えていく構成を考えた。鶯谷という特殊な街の空気感の中で、外部との距離を適度に保ちながらも内側の様相を露出していくような建築を構想する。それは単純に開かれた場所でも、ただひたすらに閉じる場所でもないような、いわば或る「閉ざし」を作ることが同時に逆説的な「開き」も作り出す、そんな関係性を孕んだ建築である。



■変貌とその閉ざし方 / 開かれ方

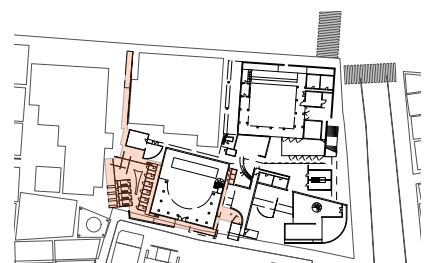
ダンサーやキネマ倶楽部の人たちが別の自分に変貌していく行為にたいして一つずつ場を与えていった。更衣室のみならず、受付、ドレスを選ぶためのショーケース、イベント中でも人目につかないように化粧を直せる化粧室など、様々な変貌過程に対して場が作られている。具体的には変貌する前の身体を包み込むように隠し、変貌した後にホールに向かう身体を一時的に都市に接触させるという操作を行った。



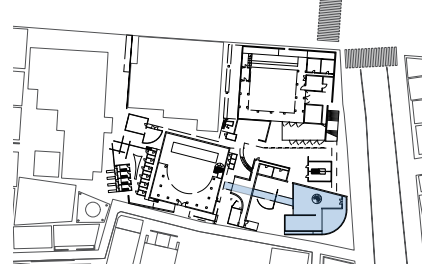
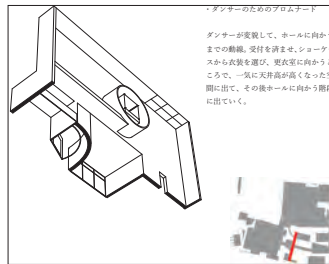
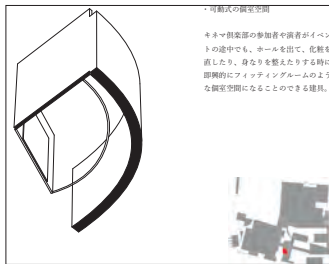
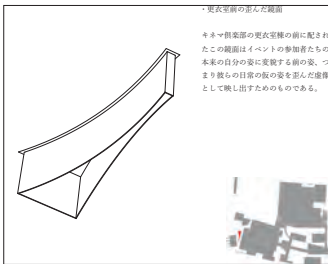
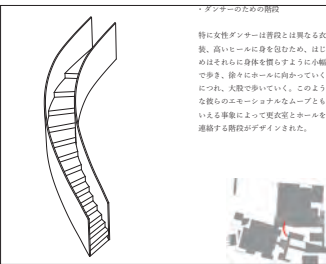
■ムーヴメント

先のダイアグラムで示した、解体された殻は、外部との距離を適度に保ちながらも内側の様相を露出していく。殻は壁面やヴォリュームなど、様々な形を変えながら、異界の住人達に居場所を与えていく。

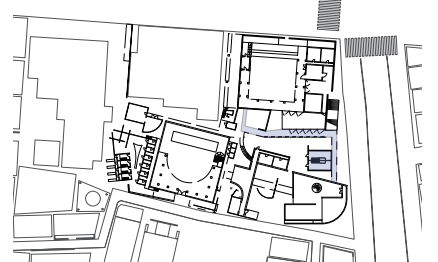
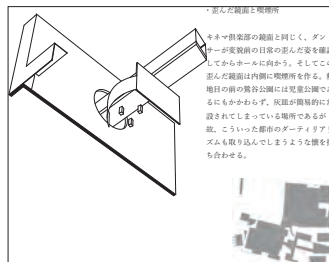
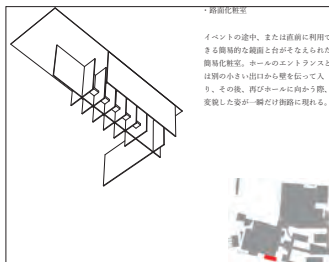
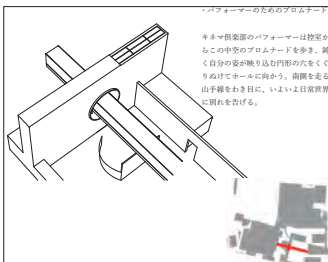
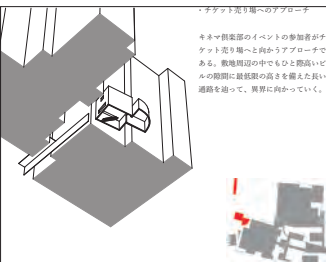
このような操作によって以下のように、ダンサーやキネマ倶楽部のイベントの参加者たちが別の自分に変貌していく過程に対して、一つずつ場を与えていった。ここで作られる場の質は彼らの変貌する行為にのみ収斂せず、その変貌過程がどのようにして外部との距離感を適度に保ちながらも、あるところでは外部に接することができるか、ということにも寄与している。そしてこれらが集まって経路を作っていくことで一般客ダンサー、講師ダンサー、イベント参加者、イベントパフォーマーたちの変貌していく過程のムーヴメントが設計される。



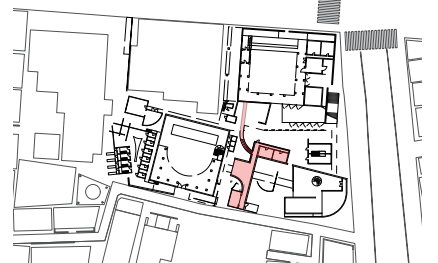
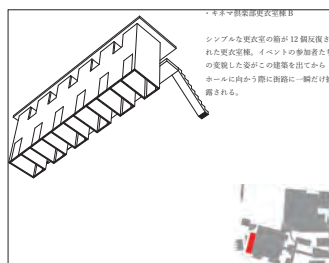
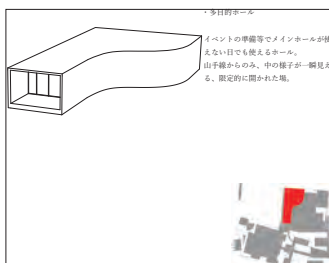
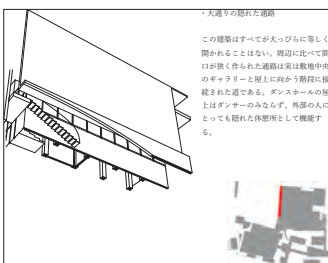
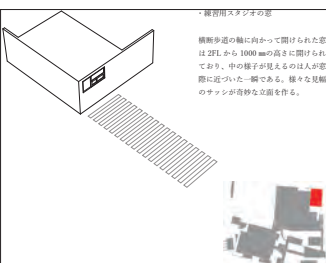
・キネマ倶楽部イベント参加者
【アプローチ→チケット売り場→更衣室A・B→ホール】というムーヴ。また、イベント中でも着替えたり、化粧を直したりできる簡易化粧室がそなえられる。



・キネマ倶楽部パフォーマー
【アプローチに隠れる→受付→演者控室→プロムナード→ホール】というムーヴ。また、リハーサルスタジオや音響室などが取り付く。



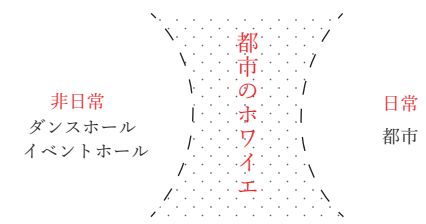
・講師ダンサー
【講師用更衣室→講師控室→列柱のアプローチ→ホール】というムーヴ。講師ダンサーのムーヴメントは一般の人が建築にアプローチするための動線と合流する。



・一般客ダンサー
【受付→衣装ショーケース→更衣室→階段→ホール】というムーヴ。階段は50mmを公差に踏面が増えていく。

■都市のホワイエ

非日常の空間に自己を埋没させる人たちがいる一方で、直接的にこのホールに目的を持たない人でも自由に出入りできる都市のホワイエのようなものも作れないかと考える。特にキネマ倶楽部の集客は時に絶大で、前面道路はライブに集まるサブカルチャーのグループなどで、祭りのように騒然とした状況になることもある。このような人たちを含め、直接ホールに目的を持たないような人でも立ち寄れるような都市のホワイエのような機能を敷地中央に貫通させることにした。無縁化された非日常空間に直接は干渉せずとも、日常的な場も担保できるようなある種の距離感を作りながら都市に接続される場所である。



変貌の断片



一般客用の更衣室の廊下から変貌したダンサーのドレスの足元が見えるシーン。奥に見えるラブホテルは中身をほとんど隠す外構自体にネオンがとりつき、街路を不気味に照らすのに対して、無機質な壁からダンサーの色鮮やかなドレスの足元が外部に少し見える。

ダンサーの街路



大通り沿いに面した講師用控室からは、時折ドアが開き、衣装をまとった講師ダンサーたちが現れ、颯爽とホールに向かっていく。パーコーナーに向かう階段とも動線が合流するため、講師の変貌のムーヴメントと一般の人の動線とのノードでもある。

限りなく閉ざしに近い開き



都市のホワイエに足を踏み入れば、そこには変貌のスペクタクルがある。もしかしたらちょっとした会話も生まれたりするかもしれない。だが、完全には理解しあわなくていい。なんとなく存在を認知し、互いにふさわしい距離感でもって共生がなされる。接続過剰な現代においてある種の切断面が作り出す、接続のカタチ。

心身の変貌



更衣室に入る前、つまり変貌を遂げる直前の歪んだ鏡像を確認して、日常を捨て去る準備をおこなう。変貌前と後では、見た目もろとも内面も変化する。ただ場を添えるのではなく、エモーションな変化にも寄り添うことで、より変貌が楽しくなるのではないかな。

器としての広場



屋上テラスにはキオスクコーナーがあり、だれでも利用できるパブリックな場所となっている。敷地目の前の鶯谷公園のように、様々な行為を引き受けるダーティリアリズム。

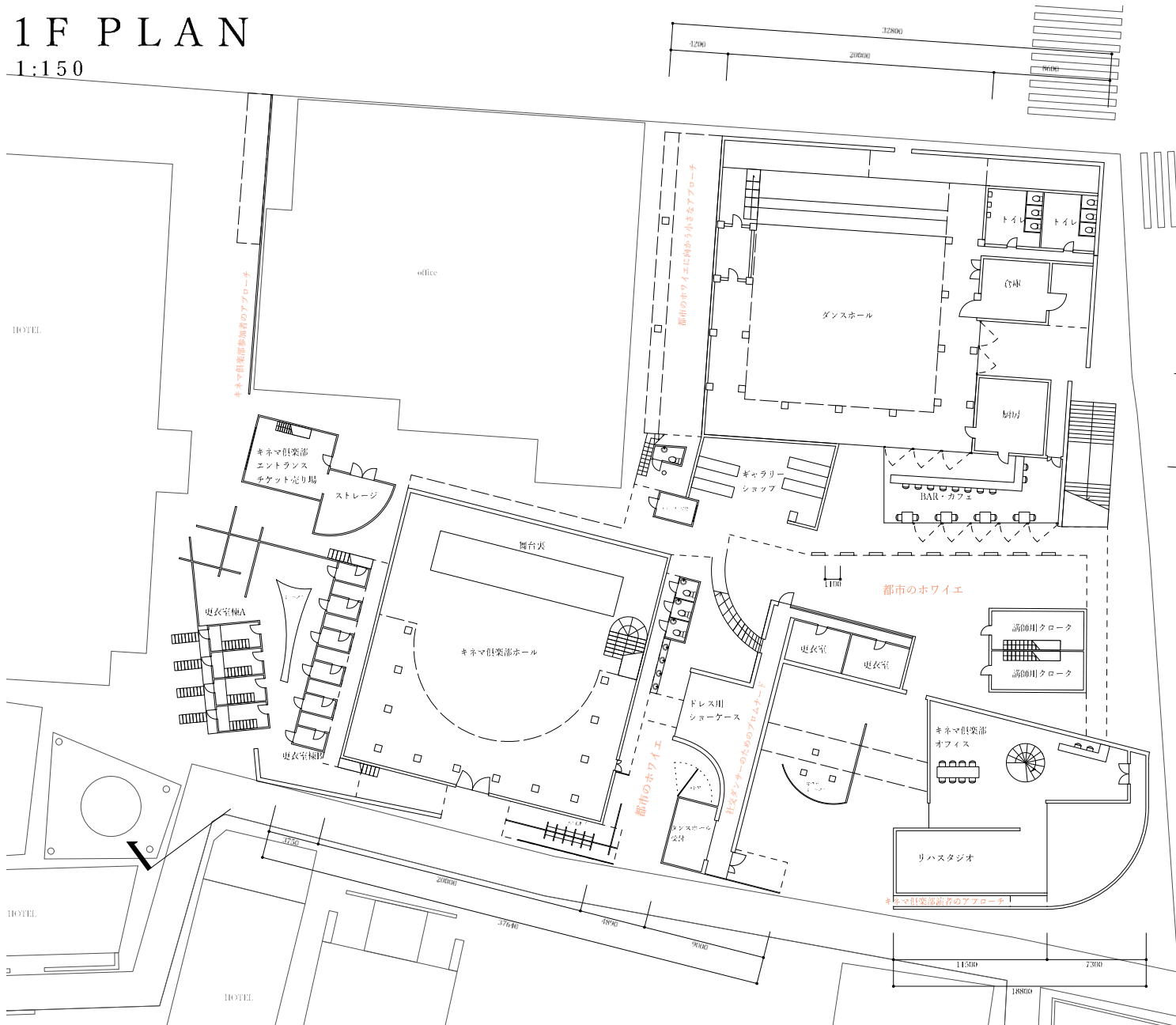
残像としての関係性



見る、見られるの関係は敷地内で完結しない。或る時にはビルの4階からちらりと見えたり、山手線の車窓から刹那的に認識したり、というように瞬間が都市をハックする。

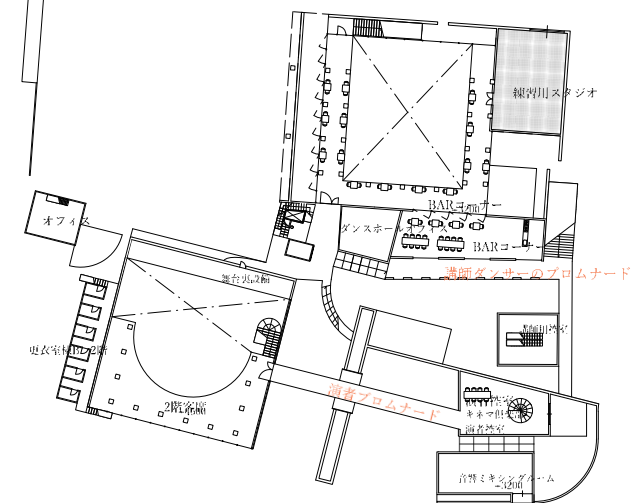
1F PLAN

1:150



2F PLAN

1:300



SECTION

1:300

